



自己紹介 安孫子 尚正

好きこそ物の上手なれ

- ・職業 都市及び地方計画分野の技術的解決手法を持ってプロジェクトを推進するコンサルティングマンです。45歳 実務経験 23年目
- ・私の人格形成は職業経験によるもの。
- ・暮らすことと地域形成することの言行一致を職業経験から強く感じていた。
- ・平成18年6月に社会への自己表現として、まちづくりをデザインする会社を設立。
- ・職業経験
 - 筑波研究学園都市のリニューアルプロジェクト 筑波北部工業団地開発
 - 東北自動車道加須IC地区画整理事業の事業推進、宅地開発の計画と設計を担当し、事業前から完了までゼネコンと一緒に携わる
 - 都市圏域の都市計画マスタープランや駅前再開発系の計画を担当
 - 関東のニュータウンの宅地開発

本日の話題 キーワード

- ・読書感想
- ・企業城下町
- ・新居浜の都市形成と産業構造都市新居浜
- ・次世代まちづくりへ
- ・地方都市の人材確保、定住自立と立地適正化の都市計画

源泉 政友から始まる住友400年の物語

住友 政友 (1585~1652) ←→ 著者 西 ゆうじ 画 長尾 朋寿

越前・丸岡出身。

文殊院旨意書は住友の企業精神の根幹となっている。

共に福井出身。

故郷の偉人は住友家初代の政友氏だと、誰からともなく教えられて育った…

～あとがきより～

住友グループ広報委員会から、日本が世界に誇る最高のメディア漫画で情報発信したいと協力を求められる。

源泉 感想

～第4話

寛永5年（1628年）頃、文殊院（政友）44歳の時に京の上柳町に富士屋嘉休を創業する。
泉屋蘇我家の友以を舞子に迎える。
南蛮吹き技術を持つ泉屋蘇我家と富士屋住友家が泉屋住友家となる。
住友の事業精神の根本となる「旨意書」を記す。

第5話

歓喜の銅山発見
三代目友信から四代目友秀の時代になると、元禄三年九月、別子に銅山を見つける。
翌年、稼業願いが認められ、向こう5年間の稼業が許される。
元禄七年夏、山火事より、132人の犠牲者を出す。供養のため、開墳場を設ける。

源泉 感想

第7話

別子銅山永代稼業
幕府より永代稼業が認められ、立川銅山も別子銅山に併合される。

その後、銅は我が国的主要輸出品のひとつとして海外へも送り出されていた。

第8話

廣瀬平が別子銅山支配人となる。
「湧時深緋」となり経費がかさむ、物価の高騰もあり経営難に陥る。
明治維新を迎える。新政府が幕府領であった別子銅山に接收命令を下す。
新政府副總裁、岩倉具視に嘱託し、泉屋住友による永続經營が許可される。

源泉 感想

第9話

生産量を上げるため、西洋技術を積極的に取り入れ、別子銅山の近代化に着手する。
プラスから来日した技師ヨウクの目論見書を元に牛車道、ダイヤモンドでの第一通洞貫通、東延斜坑の開削などをする。
12代目友耕は、「君臨すれども利害せず」とい、住友本家が万世不朽ではなく、別子銅山=事業ごとかが万世不朽とする。そして、廣瀬を総理代人として、事業の一一切の権限を委任した。近代企業として、新たなスタートを切る。

第11話

開坑二百年を経て、重慶に願い出て、楠公像を建立する。
上部下部鉄道が運行。
廣瀬の甥、伊庭貞剛が二代目総理代人となり、住友をさらに飛躍させる。
製錬所から出る亜鉛ガスの煙害が田畠山林を覆い、枯らしきけ、近隣住民が愛媛県へ訴え出る。

源泉 感想

第12話

住友は伊庭貞剛の指導の下、土山と化した別子を継なす山に退すため、数百万本の植林を開始する。類を見ない社会的責任=C.R.Sを実践する。

煙害を解決するための打開策として、製錬所を四阪島に移す。しかし、かえって煙害は対岸の今治まで波及している。賠償金を払うこととなつた。

住友は自由で煙害研究を行い、先進諸国への技術者派遣で新技術の導入に努める。

エンディング

第二次世界大戦、戦後の財閥解体など苦難を乗り切り、いま明日に向かって歩んでいます。そこには、初代文殊院政友から受け継がれてきた「住友の企業理念」を忘れないことがあります。その証ひの一つが、百年以上も前に枯れた別子銅山を継なす山に戻し、煙害を根絶させたことなのです。

新居浜と住友の関係が描かれていない。

その結果、画期的な中和法を発見、長年にわたった煙害を克服する。

企業城下町とは

- 特定の大企業あるいは同系列の企業グループが立地することで発展し、企業の存在なくして都市機能が維持されない都市
- 明治近代化以降、明治政府の殖産興業によって官営工場が設立される。官営工場は経営が行き詰まり民間に払い下される。
- 明治20年頃から民間の大工場建設が始まる。近代的な工場が建設され、労働者の集約により都市化が進行し企業城下町の先駆けとなる都市空間が形成された。
- 鉱業の場合、官営鉱山（小坂鉱山、釜石鉄山、三池炭鉱、高島炭鉱等）が民間に払い下される。政商や財閥は鉱山を買収し始める。
- 鉱業の場合、山間部に住宅や精錬所等を建設し鉱山町を形成した。重要なポイントは、鉱山業から工業への技術発展を遂げたことである。工業へ発展することで、山間部の鉱山町から農地を買収し平地へ、あるいは埋立等を行いながら都市化を進展させた。

企業城下町とは

- 日本の工業都市は、複数の企業が資本投資した例は少なく、ある時期まで一企業あるいは企業グループが工業化を牽引した企業城下町が多い。
- 産業で特化した日本の近代都市計画現れと現在近代化産業遺産を活かしたまちづくりに向かっている特徴がある。
- 産業遺産を活かしたまちづくりを理解する、解き明かしていくには、生産活動が都市生活及び都市空間の中に反映されていることを理解することが必要と考える。
- 都市計画は産業に特化、居住環境は、企業の社宅、福利厚生施設により確保されていた。
- 都市と企業の生産活動は運命共同体
- 平成19・20年トヨタが世界一の生産台数と利益を上げ豊田市の財政評価指標は常に上位
- 平成19年夕張市の財政破綻 斜陽産業の炭鉱

企業城下町とは

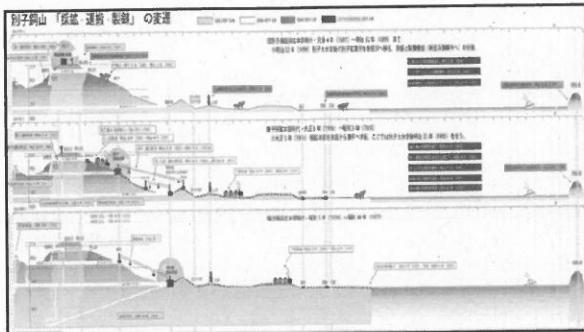
- 都市問題は、
 - 従業員の大量移動による都市の急速な膨張により顕在化
間に合わないインフラ整備（地方との関係、交付金）
- 国の直轄工事 建設工事による一定レベルを確保した地方都市のインフラ整備
- 地方都市の工場立地の促進に寄与した面がある
- 不況により、斜陽産業化し地方の疲弊状況の顕在化した（全国一律）
- 鉱業から工業への技術革新が起きた（新居浜の特長）

新居浜の都市形成と産業構造都市新居浜

人口の急増

江戸期（推計）	19,435人
明治初期（推計）	30,000人
大正2年	38,549人
昭和35年	125,688人
※別子山村	
明治38年	11,186人
大正2年	3,018人
昭和10年	1,366人

- 住友企業の発展と生産拡大による労働人口の流入、転入者の増加とみられる。
- この時代に現在の人口水準が形成された
- これ以降は全国並みに増加から減少傾向となる。
- 工業都市を形成した後は全国並みとなるところが、日本の都市計画施策の均一化がみられる。



新居浜の都市形成と産業構造都市新居浜

人口動態

転入転出 昭和46年 20,574人
昭和54年 10,811人

- 人口の流動化が止まる
- 昭和47年頃までは 県内流入 > 県外流入
- 昭和48年以降から 県内流入 < 県外流入
- 住友企業関連の影響とみられる

特徴的なのは核家族（世帯人口が小さい）が進んでいた。

昭和49年以降、川西地区は前田社宅等無人化（撤去）したことで減少、川東と上部地区は増加（スプロール化）していた。

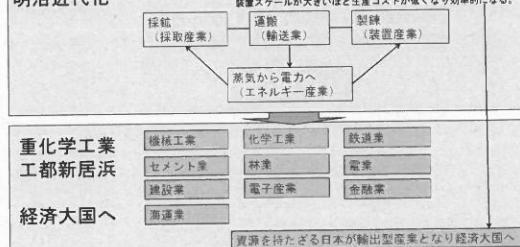
ことで、都市問題が起こっていた。

新居浜の都市形成と産業構造都市新居浜

- 昭和2年 篠尾勘解治が新居浜での後発策を唱え、鉱脈が尽きた後、新居浜で工業地域を形成するため、
 - ①築港
 - ②沿岸部の埋立（工場立地）
 - ③化学工業や重機械工業など事業を興す
 - ④都市計画（昭和通り建設等）実行
 - ⑤共存共栄の思想（昭和通りの橋名に現れている）
- これが工都新居浜の誕生であり、他の企業城下町同様の産業に特化した都市計画の源泉となっている。（その後の都市計画の流れを作った）

新居浜の都市形成と産業構造都市新居浜

明治近代化



新居浜の都市形成と産業構造都市新居浜

- ・住友企業の重化学工業への発展後、鉄鋼関係の企業が興り始める。
- ・高度経済成長期を経て 昭和50年代には、中軒及び泉川で農地転用が多く、同時に住宅着工率が増加した。
- ・昭和通り及び喜光地商店街以外に、多喜浜駅前界隈や西ノ端あたりで商店街が形成され、市街化の拡がりをみせた。商業機能の分散化。

※昭和50年以降、川西地区が人口減少し、郊外へのスプロール化現象が見られ、駅前土地区画整理事業が完了し、中心部への居住が戻り、今後はまちなかの空洞化（空家）をバネにまちなか居住を進めていくことが望まれる。

新居浜の都市形成と産業構造都市新居浜

- ・公有水面埋立 都市計画手続き→工場立地 臨海工業地帯の一翼を担う。
昭和4年 沿海工事並ニ公有水面埋立願を愛媛県へ提出
申請者 住友別子鉱山
昭和5年9月認可
- ・築港 → 産業発展の基盤
防波堤の築造、公有水面の埋立、岸壁の建設
昭和8年着工 昭和14年完工

新居浜の都市形成と産業構造都市新居浜

- ・昭和37年 新産業都市建設促進法により東予地域が指定される。
大都市圏への人口と産業の集中を排除し国土の均衡化を図る意図がある。
しかし、中核拠点開発構想ゆえに地方への人口の定着化が不況によりかえって大都市圏への集中を生んだこともある。
- ・多喜浜塩田の跡地、黒島臨海工業団地、新居浜東港計画、垣生工業団地の造成

企業城下町の比較 日立

- ・社宅
- ・大正10年頃の資料によると、社宅は全体で600棟ぐらいあった。
- ・間取りは棟割り長屋と呼ばれた一棟通しの部屋もあった。普通一般的な社宅は、若干の土間と板の間があつて、押入れのついた6畳一間と、土間と、板の間台所に押入れのついた3畳と8畳の二間が多かった。
- ・屋根は杉皮葺き、だれが名付けたのか、これがハーモニカ長屋である。
- ・鉄筋コンクリートのアパートが建つのは、昭和30年代である。
- ・伝令長屋、飛行機長屋などと勝手に呼び名が付けられた長屋もあった。
- ・家賃、電灯料、水道料は一般社宅ではすべて無料であった。有料となるのは戦後のことである。

次世代まちづくりへ

- ・90年代以降、長引く不況と産業構造の変化によって、工場閉鎖、海外移転が展開されると、企業城下町は斜陽産業の町として印象付けられていた。
- ・こうした中で、近代化産業遺産をまちづくりに活用しようとの動きが始まった。
- ・世界遺産：富岡製糸場、石見銀山、九州山口の近代化産業遺産群、足尾銅山等の世界遺産への動き
- ・まちづくり活動に関していえば、産業遺産の保存活用が歴史的希少価値に限られている点に物足りなさがある。重要な文化財としての保存は歓迎すべきだが。
- ・しかし、近代化産業遺産は、特に鉱山町、地域の広い範囲に工場だけでなく、鉄道、倉庫、発電所、給水所、社宅、福利厚生施設などが配置されており、それらが全体で大量生産と技術進展を実現してきた。
- ・足尾では、まち全体を博物館とするエコミュージアム構想などの動きがあるが、生産システムを産んだ全体を保存活用するに至っていない。

次世代まちづくりへ

- ・施設の保存活用の面では、施設を拠点とする事業になっている。
- ・たとえば、文化庁の重要伝統的建造物群保存地区制度を設けているが、倉敷を例にとると保存地区（大原美術館、旧大原家東邸等産業遺産も含めて）に選定されている範囲は施設が保存されているが、チボリ公園の建設時に分散式家族的宿舎や田園都市風社宅は取り壊された。
- ・紡績業の展開と都市形成との関係性をもつと追及していれば、保存の見直しがあっただろうと思う。
- ・地域全体、都市全体で展開されていた生産システムは、社宅や福利厚生施設の中で営んでいた生活関係についても理解されてまちづくりあるいはまちおこしに活用できるだろうと思う。
- ・人の生活や暮らしと労働環境に注目すれば、希少価値のある施設の保存活用として建造物を何が何でも残す必要性はない。コストがかかる。

次世代まちづくりへ

- 施設 別子銅山記念館、別子銅山記念図書館、広瀬歴史記念館、マインピア別子建設後研究 経済産業省の33近代化産業遺産、金銀銅サミット新居浜開催、産業観光に向けた調査計画、まちづくり整備計画
- 市民活動 旧山根精錬所煙突等登録有形文化財、山田社宅→まちおこし活動の場に人づくり 語り部、伝承、新居浜南校ユネスコ部の活動、産業遺産Jrマイスター養成 ものづくり体験講座
- 社宅や娛樂施設（福利厚生施設）があって、下部鉄道の地方軽便鉄道化された時期があって、教育施設（西中学校、懇親小学校）もあって、もっと生産システムのうち労働と関連する生活面に注目すべきと考える。オールヒストリーと称して聞き取りを展開し始めた。

次世代まちづくりへ 日立の生活オーラルヒストリー

- ・水場、便所は各家の共同で、管理人掃除は輪番制であった。金山が同じ仕組みの中での生活だから、トラブルもあるにはあったが、過当な争合もあって競争を大きくするようなことは少なかった。
- ・共耕の場合は、金山に限られ、子供も多かったせいか、その数は少數だった。
- ・生活必需物資は、大半が山内で購入した。米、味噌、醤油、乾餅、乾魚、乾肉、乾豆腐は金山の萬泰閣（ばんたいやくとう）で、その他は各地区にそれぞれ販路があり、集市、雜貨店はどこで求められても、青果、魚介類は山沿いの方、行商も来た。
- ・本郷通りの商店街は、呉服、洋品、和洋菓子、鮮魚、雑貨、時計、文具、豆腐屋、八百屋などで、洋服、家具類は町から購入していた。当時はそれで十分な事足りていた。
- ・下校後、小学生（尋常高等小学校）は、米、薪炭などを販売所から家まで背負わされた。各家庭に背負子が一つはあった。
- ・浴場も大同で、各地区にひとつずつあった。別山興賀電池と同様、今も残っている古い浴場である。繩付があり、販売所から購入した4.2kg（2.2kg）の大きさのやかんを長の木の長い入浴券を台に置けて入浴して、浴槽の壁には絵はかれて見た松島に似たべべで描かれた海沿の風景があった。
- ・郵便物の郵便、書類、貴重品の届け出の手紙の手で行われていた。大正10年7月、橋本東の人が会社領に差し出された封書で、表書きは海津藤（海藤緋）日立金山中で書かれ、ちゃんと記載された。支線日立金山で書いている郵便物はたくさんある。
- ・また各地区に郵便部があり、同郷、野柳の販賣者、歌謡音楽の練習会などに無料で開放されていた。伝染病流行の際に、衛生講話も開かれていた。

次世代まちづくりへ

別子銅山近代化産業遺産は点在して広範囲に位置しているため、全体を重伝建地区にすることは不可能。手厚く保護する制度が現状ない。

ここ別子銅山記念図書館で郷土史コーナーに産業遺産が充実し、郷土研究のライブラリーとして当たり前の機能が備わり、別子銅山を読み解く講座、伝承する仕組みがある。

これまでの都市計画を見ると、産業に特化した経済成長の名のもと建設行政の運営は、景観や歴史文化を取り込んでいくことにシフトしている。

産業に重点を置いた都市計画は間違いではないが、産業全体が知的生産にシフトエイトしている現代では、「開発」「保全」将来都市像の描き方がもっと地方独自性と創造的であっていいはず。

産業に特化しているのであるから、産業遺産を含めて今後の都市全体と生産システム全体が同じ方向で語られて、地域利益を志向する思想を示していくべき。企業市民と市民の営みは大事。

地方都市の人材確保、定住自立と立地適正化の都市計画

結論や方法論はわかりませんが、

地方都市は、産業振興と働く場所を確保して、人材確保と定着化を継続していく、集中的な戦略を検討していく。若者の地元意識を大事にして、人材定着化と定住促進を図る計画を充実させていく

立地適正化の都市計画は、新居浜市に必要。

産業遺産を歴史風景海道に結びつける知恵を出すべき。当たり前の生活は語りにくい（気づかぬ）ものですが、もっと書き取りを行って、その中に活路を見出していく。東予地域でひとつ程度認定を行いたいのが四国整備局の意向。

産業に特化した都市計画

企業の工業開発と都市計画の関係

「現代都市論」（柴田徳衛）の弁では、

都市を人の側面（労働力）ではなく物的側面（道路、建築物、上下水道）で見ると、個別企業が都市計画に取組むことは採算に合わない。

しかし、新居浜や日立では積極的に企業が都市計画に関わっていた。

一方では、景気に左右される企業運営では、長期的な視点を持つ都市計画の実行は不可能。

企業の開発が先行し、行政施策が追随する逆の関係性が、民間開発をコントロールできない。

法定都市計画の限界、市民（企業市民）との協働をより一層考えていく「まちづくり」が自立した都市圏を形成し、定住促進を図る上で重要。